国際交流・留学生センター

レポート　Vol.1

産業能率大学

目次

国際交流・留学生センター長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

学長挨拶・・・3

上智大学主催日本語スピーチコンテスト参加報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

異文化交流フェスタ「私のふるさと」開催報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

異文化交流フェスタ「異文化聞こう・話そう会」開催報告 ・・・・・・・・・・・・・8

2021年度　新型コロナウイルス禍での新しい形の国際交流
「2021 オンラインめぐろ国際交流フェスティバル」参加活動報告・・・・・・9

あとがき・・・11

国際交流・留学生センター長挨拶

国際交流・留学生センター長
経営学部　教授　武内 千草　挨拶

はじめに

産業能率大学にご関心をお寄せいただきありがとうございます。私がセンター長を務めております「国際交流・留学生センター」の会報を発刊することになり、ご挨拶をさせていただきます。こちらの会報では、主に本学の国際交流活動への取り組みや、留学生の活動を紹介させていただきます。

1. 本学での国際交流活動紹介

本学には「留学生会」という団体があり、留学生は全員所属しています。2021年度のメンバーは63名で、出身地は中国・ベトナム・台湾・香港・韓国・モンゴル・ネパール・タイ・マレーシア・ミャンマーと多岐にわたります。また、本学には私が設立の発起人である国際交流同好会(IECS ＝International Exchange Club SANNO)というサークルがあり、国際交流に興味のある日本人学生と留学生の有志が所属しています。しかし、両団体ともコロナ禍でほとんど活動ができていない状況です。（留学生会の「異文化交流フェスタ」という留学生によるスピーチ・プレゼンテーション大会はオンライン形式で開催ができました。そちらの様子は後のページでお届けいたします。）

↑異文化聞こう・話そう会（日本語スピーチコンテスト）の表彰の様子

2. 今後の活動に向けて

コロナ禍で海外の往来が難しくなった今、産能大の留学生や国際交流に関心のある日本人学生に対して今までとは違った形の支援を考えるために、彼らは何を思い、どのような活動をしたいと思っているのかを本人達から直接聞きたく、留学生会の会長と国際交流同好会(IECS)の会長と私の三者でオンラインで対談を行い、現在の状況をヒアリングしました。

留学生会の会長から出てきた意見としては、コロナ禍で入学してからしばらくオンライン授業だった学生(2021年度時点の2年生)は特に日本語の面で苦労し、学校生活や日本語に慣れるまでにより多くの時間を要したことが伺えました。国際交流同好会の会長からは「日本語や母国との文化の違いで苦労している留学生を積極的に支援したい。」という申し出があり、留学生会の会長も好意的に受け止めているようです。教学側でもこれらの学生を注意深く見守り、支援していくことを考えています。国際交流同好会の会長から出てきた意見としては、「現在は海外渡航ができないので、国内で留学生と交流ができるのはとても貴重な機会となっている」「国際交流に興味のある日本人学生には留学生会の活動（前述の留学生によるオンライン開催のスピーチ・プレゼンテーション大会など）への参加を積極的に勧めていきたい。」とのことでした。教学側からも積極的にこのようなイベントを日本人学生に紹介し、学内での国際交流を推進していくとともに、「オンライン留学」などの海外渡航をしないで国際交流体験ができるような仕組みを早めに整えていく必要があると感じております。

コロナ禍で海外渡航が難しくなった今は国内でできる活動を積極的に行い、留学生の日本での貴重な時間が少しでも輝くように、また国際交流に興味がある日本人学生が少しでも満足できるように、オンラインを含めた国際交流活動の幅を広げていけるように務める所存です。

学長挨拶

学長　浦野　哲夫　挨拶

はじめに

日頃、産業能率大学へご支援、ご協力を賜りありがとうございます。この度、本学「国際交流・留学生センター」の会報を発刊することになりましたので、ひとことご挨拶させていただきます。

1. 個人的な経験

個人的な話ですが、私は前職（富士通株式会社）で都合5回、合計25年間の欧米での駐在勤務を経験しました。
その間に、ICTのお客様、現地の社員、現地の近隣住民との交流を重ね、本当にいろいろな所でいろいろな人にお世話になりました。家族帯同でしたので、現地の学校関係者にも大変お世話になりました。

アメリカ、欧州というと先進国と考えられますが、「日本の常識は欧米の非常識」を実感することが多々ありました。差別がないわけではないことも経験しました。

しかし、総合的に言いますと、欧米での仕事や生活は、決して容易ではなかったけれども、日本では経験できなかったであろう充実したものでした。有難い経験だったと思います。その思いから、いつか何らかの形で恩返しをしたいと考えています。

2. 日本のグローバル化

日本では、「少子高齢化」がものすごい勢いで進んでいます。「少子化」に歯止めが掛からない現状では、消費者数が減少していきますから、日本の国内市場は縮小せざるを得ません。労働力の不足ももたらします。一方、「高齢化」傾向は、医療費の膨張と同時に消費の縮減という形で市場の縮小をもたらします。更に、労働力不足ももたらします。

従って「少子高齢化」は、経済的には日本市場の縮小に伴うコンペンセーション（代償）として、アウトバウンド（輸出）な展開を必須とします。また、労働力不足解消のためには労働力のインバウンド（輸入）も必須です。その労働力のインバウンドにより、国内市場の拡大が期待できます。観光立国という国の方針も、インバウンドの観光客の増加をもたらし、結果的に市場の拡大が期待できます（以前の「爆買い」ほどではないにしても）。

3. アウトバウンドとインバウンド

アウトバウンドは、いわば海外での競争に参加することを意味します。しかし、私の25年間の海外駐在生活のような古き良き時代はもう終わりました。高品質・低価格で必勝する保証はありません。今やGAFAやBATHの時代です。海外で稼ぐには、GAFA/BATHのような展開を志向するのではなく、現地の人々の協力と意欲と創意工夫が前提条件になります。過去のような単なるアウトバウンド方式は時代遅れです。

インバウンドは、海外からの労働者や観光客を呼び込むことですから、日本が彼らにとって住みやすい、過ごしやすい、楽しいところであることが前提条件になります。「日本良いとこ一度はおいで」で来てもらっても、住みやすくなければ帰ってしまいますし、口コミでのリピートも期待できなくなります。観光客も長続きしない可能性があります。インバウンドの拡大には日本の魅力の継続的な発現が前提です。世界の常識から外れたり、不当な差別をしたりすることは論外です。

4. 共存・共栄

欧米ではもう50年以上前から、アウトバウンドもインバウンドも広く存在しています。どの国に行っても、その国の国民だけというシーンはあまり見かけません。必ず、だれかその国の国民ではない人が存在します。そのような混在というか、共生というか、共存形態が根を下ろしています。その辺を顧みると、私は、上記したアウトバウンドやインバウンドは当然の帰結として、いろいろな人間との共存・共栄が必須化していくと考えます。

「2. 日本のグローバル化」で述べた今後のグローバル化とは、共存・共栄を意味します。日本人としてのアイデンティティは残すものの、日本国内でも海外でも、グローバルシティズンとして根を下ろす、根を張ることになると思います。また、海外から日本に来て居住する人も、母国のアイデンティティは残す一方、日本での生活の中で共存・共栄を目指すことになります。たとえ母国に帰国しても、日本との関わりを維持していくことになると思います。

学長挨拶

5. 本学の「国際交流・留学生センター」

本学の「国際交流・留学生センター」は、上記したグローバル化を前提に、国際交流に積極的な日本人と外国人の双方向的な交流を促進して、結果として「全人類に幸福と繁栄をもたらす人材を育成する」（建学の精神から）ことを追求します。センターに期待することは次のとおりです。

①日本人学生には、出来るだけ学内外の外国人留学生と交流してもらい、異文化を理解するとともに、留学生の日本における学業・課外活動・アルバイトなどが順調に展開できるような支援をしてもらう

②外国人留学生には、出来るだけ日本人学生や他の国からの留学生との交流を増やして、日本の文化、歴史、慣習を学び、また自国以外の国の文化への理解を深めてもらう

③日本人学生に関しては、就職するときに、今後の社会人生活においては、もはや国内オンリーはあり得ないこと、何らかの形でアウトバウンド・インバウンドに関係し、グローバルに活躍することを意識してもらう

④外国人留学生に関しては、就職するときに、日本で働くことも母国で働くことも他国で働くこともオプションであることを意識して、知見を広めてもらう

↑留学生謝恩会での様子 （2018年度撮影）

6. 結びに

グローバル化に伴う国際交流は誰にとっても今後のMUSTです。「少子高齢化」は不可逆的な日本のグローバル化を推進します。避けて通ることはできません。

日本からのアウトバウンド、日本へのインバウンドという言い方をしてきましたが、欧米がすでに歩んできたように、将来はアウトバウンド、インバウンドというような区別が出来ないほどに混然一体化すると思います。外国人との経済、社会、文化など多面的な交流が当たり前になると思います。

当センターの活動を通じてグローバル人材を育成し、グローバルシティズンが住む世界が実現することを祈念しています。それが私の恩返しになればこれ以上の幸せはありません。

↑留学生向け奨学金授賞式の様子
（2018年度撮影）

上智大学ソフィア会主催
日本語スピーチコンテストへの出場

本学留学生が上智大学主催日本語スピーチコンテストで健闘

上智大学が主催する留学生のための日本語スピーチコンテスト（2021年度はオンライン開催）に産能大の留学生である中国出身の温 志山さんと、ベトナム出身のグェン ティ キム ガンさんが出場した。
グェン ティ キム ガンさんは審査委員特別賞を受賞。温 志山さんのスピーチもとても感動的であった。二人のスピーチの概要を紹介したい。

グェン ティ キム ガンさん
（ベトナム出身）

テーマ：10年後になりたい自分の姿

私が10年後になりたい姿は自分の会社を立ち上げて優秀なビジネスマンになることです。この理想を実現させるために、今の私は何をするべきでしょうか。まず、卒業までにやるべきことで最も大切なのは日本語の勉強です。日本で就職をしたい外国人にとって日本語能力は最も重要なスキルとなります。そのため、自分の直近の目標は日本語能力試験1級に合格することです。また、ビジネス日本語なども勉強しなければなりません。卒業までに英語と日本語の両方の外国語を上達させることを目標としています。

日本語能力向上のために毎日日本語の勉強をしています。様々な資料を読んだり、日本人の友人と交流したりすることで自身の日本語レベルの上達を日々感じております。日本語での会話力向上のために意識していることは、アルバイト先や学校で日本人の友人を多く作ることです。分からない文章や漢字、言葉の使い方があれば、すぐに彼らに教わるようにしています。

次に大学を卒業してからのことについて話します。卒業後の5年間は、仕事のスキルアップを目標としています。社会人になったら仕事だけでなく人間関係形成に努めていくと共に、将来起業するための計画も立てるつもりです。その上で計画的にお金を貯蓄することも重要となります。5年間の会社の勤務を経て起業し、自身の会社で新たにビジネスを起こそうと考えております。具体的には、妹と美容関係の企業を立ち上げようと思っております。私は完璧主義すぎることが弱みだと思います。だから仕事に完璧を求めすぎることによってストレスが溜まってしまう可能性があります。10年後になりたい自分の姿の実現に向けて、無理しすぎることなく今後も様々な事に挑戦していきたいです。

温 志山(オン シサン)さん
（中国出身）

テーマ：10年後になりたい自分の姿

今年は私が日本へ留学に来てから5年目です。日本に来てから色々な事を勉強して考えが変わり、将来の計画を考え直しました。ですから、日本への留学体験は私の将来と深いかかわりがあると思います。これからは、計画を考え始めたきっかけ、その考えを持つ理由、私の10年後の理想の姿について話していきたいと思います。

将来の私は、介護に関係がある仕事をしたいと思っています。初めてこの考えを持ったのは18歳の時です。中国の専門学校で3年間介護の知識を勉強していました。しかし、卒業する時には「介護の仕事は辛い、給料が安い」などの現実を認識して、中国での就職をやめ、日本へ留学しに来ました。

日本に来ても、自分の未来の夢は放棄していません。私は日本にきてからの5年間ずっと老人ホームで働いてきて、日本の老人ホームの仕事内容を学びました。その結果、日中の老人ホームに共通する問題点がわかりました。その様々な問題点に対して「将来は介護と日本で勉強した知識を融合して、世界中の高齢化問題を解消する」ということが私の夢になりました。

高齢化問題の解消には様々なやり方がありますが、私は介護職員をきつい仕事から解放することを目指します。介護の仕事が楽になり、たくさんの人が介護の仕事に従事するようになれば高齢化問題の解消にもつながると思います。そのために勉強して、介護業界に貢献したいと思います。

10年後の私は各国の介護事業の連携を密にさせ、国際舞台で活躍している人になりたいです。

留学生による異文化交流フェスタ「私のふるさと」開催報告

国際交流課

留学生会では毎年前学期に異文化交流フェスタ「私のふるさと」というスピーチ大会を開催し、留学生が自分の出身国・地域のことを紹介している。テーマは母国の食・音楽・若者文化・旅行のおすすめスポットなど様々である。留学生と日本人学生、教職員がお互いに知り合い、異文化理解を深めることを目的としている。

例年は学内の教室でプレゼンテーションを行っているが、2021年度はコロナ禍で対面の開催が難しいためオンライン形式での開催となった。新しい形式であるオンライン異文化交流フェスタの当日の様子を報告したい。

■開催日時　2021年6月28日（月）～7月2日（金）　■対象　本学学生・教職員

中国　2021年6月28日（月）

テーマ：中国の郷土料理について

中国出身の3名がグループになり、地理、料理の特徴、特産物や食習慣等について発表を行った。中国は面積が広いため、それぞれの地方ごとに食材・味・調理方法などがかなり異なる。写真などを用いて詳しい解説がされていた。

（写真右）河南省の省都長沙名物の黒い臭豆腐その名の通り独特の香りですが、人気の料理だそうである。

台湾　2021年6月29日（火）

テーマ：台湾の観光スポットと食べ物

台湾の観光スポットなどについて若者の視点からわかりやすく紹介が行われた。台湾は日本人にも親しみやすい食べ物も多く日本からの距離も近いということで興味を持つ日本人学生も多い。

（写真右）タピオカミルクティーなど、日本の若者に馴染みの深い台湾グルメの紹介もあった。

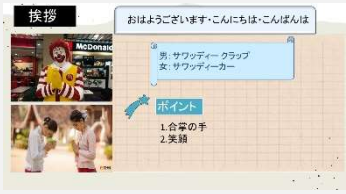
（写真左）映画「千と千尋の神隠し」のモデルとなった地ではないかといわれている九份。コロナ前は日本人観光客が大勢いた。

タイ　2021年6月29日（火）

テーマ：タイについて

タイ語の挨拶、地理、季節、お祭りや料理等について紹介が行われた。微笑みの国タイは仏教徒が多い。世界的に有名なお祭りも沢山あるそうである。

（写真右）タイは両手を合わせて挨拶をするが、なんとマクドナルドのキャラクターも行っているとのこと。



（写真左）タイのチェンマイでは世界最大のランタン祭りである「ロイクラトン」が行われている。

ネパール　2021年6月30日（水）

テーマ：ネパールの自然、文化、観光地について

世界一高い山エベレストを擁するヒマラヤから亜熱帯のジャングルまであり、魅力にあふれたネパール。本学はネパールの留学生が少ないので教職員にとっても新鮮な情報であった。自然など有名なものはもちろん、宗教感など日本人に馴染みの薄いものについても丁寧な説明があった。

留学生による異文化交流フェスタ「私のふるさと」開催報告

ベトナム　2021年7月1日（木）

テーマ：ベトナムの地理、民族衣装、建築物、自然、料理

ベトナム出身の3名がグループとなり発表を行った。地理、民族衣装、建築物、自然、料理等ベトナムの魅力を幅広く、北部、中部、南部を分けて紹介した。

ベトナムには日本でも人気の料理や観光スポットが数多くある。それらはもちろん、日本ではあまり知られていない美しい土地や文化に関しても丁寧に解説があった。

マレーシア　2021年7月2日（金）

テーマ：マレーシアの言語、観光地、食文化

マレーシア出身の2名がグループとなり発表を行った。マレーシアという様々な人種、文化や言葉が融合した国の多種多様な建築物、食文化などについて紹介した。

（写真右）マレーシアは多民族国家なので、英語が共通語として使用されている。アメリカやイギリスの英語とは違うマレーシア独特の言い回しがある。

（写真左）人気の観光スポットの紹介もあった。日本ではあまり知られていない美しい建築物、自然があり多くの人が訪れるそうである。

総括

本イベントには5日間で延べ187名の本学教職員・学生が参加した。参加者は各国・各地域の文化に深く関心を寄せ、連日多くの質問があった。

気軽に海外渡航することが叶わぬ現在、留学生たちの発表は異文化に触れる貴重な体験となった。このようなイベントは、留学生・日本人学生・教職員の相互理解を深めることができる良い機会であり、コロナ禍にもかかわらずオンライン形式で開催できたことは非常に有意義なことであった。

オンライン開催ではスライドが視聴者にとって見やすく、写真などを通じて現地（学生の出身地）の雰囲気がより伝わりやすかったという意見もあった。質疑応答も活発で、対面開催と同様の臨場感を感じられた。また、オンライン開催の方が視聴者の場所の制限を受けずに学生や教職員が気軽に参加することができたと推測される。センターでは今後もこのようなイベントを工夫しながら開催していく予定である。

Zoomを利用した開催の様子

留学生による異文化交流フェスタ「異文化聞こう・話そう会」開催報告

国際交流課

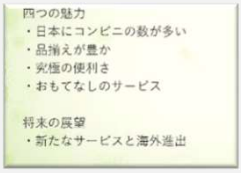
留学生会では毎年後学期に異文化交流フェスタ「異文化聞こう・話そう会」を開催している。前学期の「私のふるさと」では留学生の出身国・地域についてのスピーチを扱うが、後学期の「異文化聞こう・話そう会」では留学生が日本で出会ったカルチャーショックや日本と母国の違いについて感じたことというテーマでスピーチを行う。また、コンテスト形式を採用して受賞者には表彰を行っている。 2021年度はコロナ禍で対面の開催が難しいためオンライン形式での開催となった。新しい形式であるオンライン異文化交流フェスタの当日の様子を報告したい。

■開催日時　2021年12月13日（月）～12月16日（木）　※表彰式は12月17日（金）　■対象　本学学生・教職員

金賞　テーマ：日本のコンビニについて

数、商品開発力、便利さ、おもてなしのサービス精神の四つの面から日本コンビニの魅力について紹介してくれた。「日本人にとっては当たり前になっているコンビニの魅力を改めて感じることができた」と、多くの視聴者から好評を得たスピーチであった。

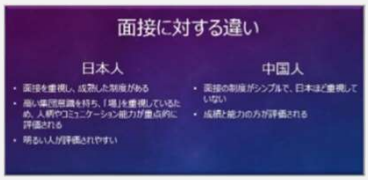
白 書成(ハク ショセイ)さん
中国出身
経営学部 経営学科2年



銀賞　テーマ：日本人と中国人の違い

「礼儀」「面接」「化粧」「他人への配慮及び主張・自己表現」という視点から、自身が感じた日本人と中国人の違いについて語ってくれた。日本と中国の文化・歴史の違いから考察されており、論理的でとても説得力のあるスピーチであった。

崔 超洋（サイ チョウヨウ）さん
中国出身
経営学部 経営学科1年



銅賞　テーマ：異文化を感じたこと

来日してから感じた、日本と母国との違いを「日本のペット文化」「物価の違い」「生活環境や設備の違い」「仕事に対する態度」の観点から語ってくれた。日常の生活に即した、具体的でわかりやすいスピーチであった。

ポーター　ベンチャワンさん（左）
タイ出身
経営学部 経営学科1年

レイチェル　タンミンさん（右）
マレーシア出身
経営学部 経営学科1年

奨励賞

テーマ：日中の祭日の違い

張 孝開(チョウ コウカイ)さん
中国出身
経営学部 経営学科1年

テーマ：日本で驚いたこと

ダン ティ チュンさん
ベトナム出身
経営学部 経営学科1年

テーマ：日本とベトナムの文化交流

ルー ミン ニュアンさん(左)
ベトナム出身
経営学部 経営学科

グェン ティ キム ガンさん(右)
ベトナム出身
経営学部 経営学科2年

テーマ：日本で気付いたこと

呉　澄淼(ゴ スビョウ)さん(左)
中国出身
経営学部 経営学科2年

任 彬彬(ニン ビンビン)さん(右)
中国出身
経営学部 経営学科1年

総括

本イベントには5日間で延べ171名の本学教職員・学生が参加した。「留学生の発表を通じ、ずっと日本に住んでいると当たり前になってしまって気付かないことに気付くことができた」という意見も多かった。質疑応答も活発に行われ、日本人学生・教職員と留学生の相互理解の促進において非常に有意義なイベントとなった。

今回はスピーチの技術・内容ともにレベルが高く受賞者を決めるのが困難であったが、”話や資料のわかりやすさ”“着眼点”という観点から金賞は「日本のコンビニについて」というテーマでスピーチを行った白書成さんの手に渡ることとなった。同年に行われた東京オリンピックで話題になったテーマということもあり、視聴者からの反応も多かった。銀賞の崔 超洋さんの論理性に長けたスピーチも視聴者の印象に残るものであった。他の発表者のスピーチも興味を引くもので、オンラインにも関わらず活発な質疑応答が行われた。センターとしては今後もこのようなオンライン上でも相互交流が促されるようなイベントに力を入れていきたい。

2021年度　新型コロナウイルス禍での新しい形の国際交流
「2021 オンラインめぐろ国際交流フェスティバル」参加活動報告

経営学部　教授　武内　千草

はじめに

2020年度の国際交流活動は、世界中に蔓延する新型コロナウイルスにより、成す術が見いだせない状況であった。しかしこの苦しい1年間の試行錯誤を経て、我々はオンラインで繋がるという新しい形の交流方法を知った。今回参加活動を紹介する「2021 オンラインめぐろ国際交流フェスティバル」は、公益財団法人「目黒区国際交流協会」が主催するイベントである。本学が目黒区自由が丘との様々なコラボレーション授業等を展開していることから、私が平成30年にこの協会の理事を仰せつかり、それ以降、経営学部武内2年次ゼミ生を中心に、毎年実施される「めぐろ国際交流フェスティバル」にボランティア参加させて頂いている。

2020年は残念ながら中止となったこのフェスティバルだが、2021年は全面オンラインで実施することが決まり、ゼミ内で準備を進め、2022年2月6日のフェスティバル当日、活動を実施した。

本稿では、企画を実施した学生たちの声を基に活動の内容をご報告すると同時に、オンラインという新しい形の国際交流の可能性について検証したい。

1.「めぐろ国際交流フェスティバル」とは

今回ゼミで参加した「めぐろ国際交流フェスティバル」は、公益財団法人「目黒区国際交流協会（MIFA）」が実施するイベントである。当協会は、1992年12月1日、区民主体の国際交流の推進並びに在住外国人支援を通じて地域における国際相互理解の促進と地域社会の発展に寄与することを目的として設立された。事業内容は①国際交流事業、②外国人支援事業、③国際交流並びに外国人支援に関する調査、研究、広報活動、④地域の国際交流活動団体との連絡、調整及び支援、⑤国際交流ボランテイアの発掘と支援等である。このように様々な事業内容を持つ協会であるが、「めぐろ国際交流フェスティバル」は第16回目を迎える国際交流事業に関する目黒区の一大イベントである。

コロナウイルス蔓延以前は、目黒パーシモンホールにおいて対面で実施されており、私のゼミ生もイベント3か月前から準備運営委員会に出席し、当日は全員で参加するという、ゼミにとっても大きなイベントであった。それぞれが様々なブースに分かれてボランティアをするという活動内容であり、総合受付、スタンプラリーやゴミステーションに配置される学生もいれば、希望通り、子供コーナーで外国人、日本人のお子様たちと楽しく遊ぶというブースに入る学生もいた。最も学生に人気があるのが国際色豊かな目黒区内にある大使館ブースでのPR及び物産販売のお手伝いであった。

野外に出店する模擬店は目黒区内にある外国料理のレストランが主で、人のみならず食を通しても異文化交流が出来るようになっていた。

2. オンラインでの国際交流企画提案へ

「2021 オンラインめぐろ国際交流フェスティバル」の実施が決定した際、上述したような対面と同じイベント内容が出来ないであろうことは明白であった。本学ではこのコロナ禍の2年間、オンラインでの学園祭や動画撮影を使用したスポーツ大会を実施してきた経験があり、ゼミでのフェスティバル参加は可能であると判断し、MIFAに対してすぐに参加を表明した。

ゼミでは、今回のフェスティバルには大きく分けて2つのコンテンツ、「映像の動画配信」と、フェスティバル当日の「Zoomを利用した生配信」があることを説明し、この両方に参加することを決め、各自の希望に沿ってグループ分けを行った。その結果、当日のZoom配信グループ1つと、3つの動画作成グループが出来た。それぞれのグループ内で国際交流のテーマをディスカッションし、当日配信のテーマは「やさしい日本語で国際交流」、3つの動画は「目黒区七福神めぐりの旅」、「日本の遊び紹介」、「日本の言葉紹介」に決まった。

動画作成グループはテーマ研究、動画の構成検討、動画撮影、編集を短い納期の中で実施した。外国人の方々が視聴することを念頭に置き、動画に挿入する文字には英語を入れるなどの工夫を凝らした。当日生配信のグループは、どのような参加者がどの程度の人数見込まれるのか分からない中、企画を進めなくてはならず、苦労していた様子だった。そこで、「J POP」、「日本のアイドル」、「アニメ」、「職場におけるやさしい日本語」、「職場で起こるトラブルとその対応」、「二か国語（日本語/英語）で話そう広場」というサブテーマを設定し、テーマ紹介の発表を3分程度実施してからセッション開始という流れを決め、発表用PPTを作成した。

MIFA国際交流フェスティバルに向けてのグループワーク全体像

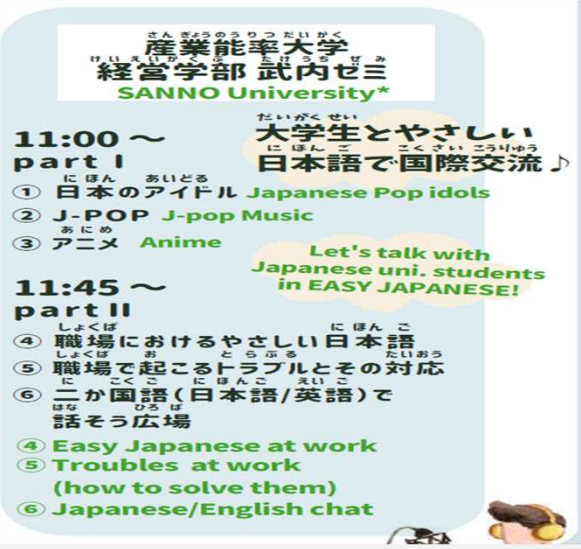
2021年度　新型コロナウイルス禍での新しい形の国際交流
「2021 オンラインめぐろ国際交流フェスティバル」
参加活動報告

3. 学生達の学び

動画作成において最も大変だったことは、視聴者に外国人と日本人の両方が想定されるため、国籍を問わず楽しめるコンテンツを考える事であった。また、「目黒区七福神めぐりの旅」では目黒区の魅力が伝わる動画であること、「日本の言葉紹介」では先ずは自分たちの方言に対する知識を深めること、「日本の遊び紹介」では自分たちが楽しんでいる様子が伝わることが大切であるという考えのもと、準備を進めた。実際の撮影はグループごとに楽しんで実施出来た様子であった。
「誰に向けての動画なのか？」「何のための動画なのか？」という目的を見失わずにグループワークを進め、自分たちが作成した動画視聴をきっかけに、他の日本文化にも更に関心を持ってもらえれば嬉しいという感想が多く見られた。動画作成のプロセスを通して「国際交流とは何か？」を考えられるきっかけになったと感じている。

↑「目黒区七福神めぐりの旅」オープニング画像

フェスティバル当日生配信プログラムの担当となった学生は6人いたが、そのうち3人はベトナムからと香港からの外国人留学生である。ゼミ内でも異文化交流を目指している武内ゼミらしいラインナップを揃え当日を迎えた。予想よりも参加者が少なかったが、日本人、外国人両方の参加者と共に、テーマに沿ってオンラインでディスカッションを行った。Zoomのブレイクアウトルーム内人数が少なかったため、ディスカッションというよりはよりアットホームなおしゃべりカフェ的な雰囲気であった。
このグループの学生達は、企画内容を決めていく際、それが参加者にとって有意義なものになるのか、適切な内容になっているのかを悩んでいた。また、司会者及びファシリテーターとしてブレイクアウトルームをまわしていく事が出来るのか？を不安に感じていた。が、実際には参加者の方々のご協力もあり、「異文化交流が楽しいと感じた」、「外国の方の悩みなどを知ることが出来た」という感想と共に、「もっとこのような国際交流を実施しなくてはならないと感じた」という意見が多くあがった。



4. おわりに

世界的に行き来が制限されている昨今、海外と日本を結ぶオンライン会議などはもちろんのこと、オンライン留学、オンライン海外旅行も一般的に見られるようになってきている。本稿でご紹介した活動も、実際に外国の方と会って話をしたり、食事をしたりすることが出来ない時だからこそ「オンラインでどうやったら国際交流活動が出来るのか？」「どうやったら日本の良さを知ってもらえるのか？」を常に考え、ゼミ生共に活動をして来た。学生達は、オンラインで初対面の方と話すことの難しさ、普段は学生として入室しているZoomのブレイクアウトルームに司会者兼ファシリテーターとして運営することの難しさなどを体感すると共に、国際交流の楽しさと重要性も学ぶことが出来た。
この経験を活かし、異文化を知る楽しさを知り、世界を知ることによる価値観の変換を学生達に促すべく、アフターコロナにおける本学の新しい形の国際交流を考えていきたい。

あとがき

編集後記

2020年初頭から新型コロナウイルスの影響により各国の往来が難しくなったまま現在に至る。日本在住の外国人留学生は休暇中に母国へ一時帰国することもままならず、精神的に不安を抱えつつも前向きにそれぞれの目標に向かって勉学に励んでいる。本学の「留学生会」は母国を遠く離れ日本で勉学に励む留学生達の交流を深め、精神的に支援する目的で発足されたもので、以前は歓送迎会や謝恩会、産能祭（文化祭）への出店、バーベキューなど様々な活動を行っていたが、この2年間はそのほとんどが中止となってしまった。そのような中で「異文化交流フェスタ」だけはオンライン形式で開催することができた。留学生達は活き活きと発表の準備や練習を行い、司会や会場準備などの運営にも積極的に参加し、素晴らしいスピーチを視聴者に届けることができた。彼ら・彼女らをとても誇りに思うとともに、限られた活動の中でも留学生同士の絆が深まったことを大変嬉しく思う。コロナ禍は今後しばらく続くであろうが、留学生支援のあり方を工夫し、一人でも多くの留学生が夢を実現できるように支援していく所存だ。

また、国際交流活動に関心を寄せる日本人学生にとっても海外留学・渡航が不可能という困難な状況が続いている。本誌で紹介させていただいた「異文化交流フェスタ」や「2021 オンラインめぐろ国際交流フェスティバル」のような国内でできる国際交流活動に積極的に参加してもらうことにより、世界の状況を知って“国際社会の中での日本”を学び、自身の将来を考えることのきっかけになればと願っている。

↑留学生と日本人学生の相互交流を促すため、図書館には留学生の出身国に関する書籍を揃えている。（写真は2019年に撮影）

スタッフ紹介

国際交流・留学生センター　センター長

経営学部　教授　武内 千草

事務局

大学事務部　国際交流課　詹 益韶
趙 冠男
古沢 茜

コロナ禍以前は様々な留学生・国際交流イベントを行ってきた。（写真は全て2019年度以前に撮影）2022年度もこのような対面での活動は制限があるだろうが、オンラインを最大限活用するなどの工夫を凝らし、本学留学生・日本人学生双方にとって満足度の高い学びの場を提供していくことが今後の目標である。

編集・発行

産業能率大学　国際交流・留学生センター
大学事務部　国際交流課

2022年3月発行

産業能率大学　国際交流・留学生センター
2022年3月発行